第 15 回日本がん・生殖医療学会学術集会
2025.2.22-2025.2.23
O-32　大阪中央公会堂

化学療法が卵子凍結を用いた妊孕性温存療法の臨床成績に与える影響

井谷裕紀[1,2]、真柄玲央[1]、水野里志[1]、藤岡聡子[1]、福田愛作[1]、森本義晴[3]

[1]IVF 大阪クリニック、[2]広島大学大学院統合生命科学研究科、[3]HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】
化学療法による妊孕性低下の懸念から化学療法開始前の妊孕性温存療法実施が推奨される．しかしながら，造血器系疾患などは妊孕性温存実施に時間的猶予がない場合が多く，生殖医療施設紹介時に化学療法が既に先行している症例もある．化学療法の妊孕性低下に関する報告は卵巣毒性を評価したものが多く，化学療法が妊孕性温存療法の臨床成績に与える影響を報告したものは少ない．そこで本研究では化学療法先行が妊孕性温存目的の卵子凍結に与える影響を検討した．
【方法】
2006 年 1 月～2024 年 8 月に妊孕性温存目的の卵子凍結を実施した 63 周期を対象とし，化学療法を先行した群としなかった群における疾患種，当院初診から採卵迄の日数，採卵数，成熟率，変性率，凍結実施数を比較した．
【結果】
化学療法を先行した群は先行しなかった群と比較し，造血器系疾患の割合は有意に高かった(69.2% vs. 10.0%, $p<0.005$)．採卵数(6.4±6.4 個 vs. 13.4±12.0 個)，凍結実施数(5.2±4.9 個 vs. 11.8±10.4 個)は有意に少なくなった($p<0.01$)．その他の項目に有意な差は無かった．
【考察】
急性白血病を含む造血器系疾患は原疾患治療に緊急を要することが多い．そのため本検討においても化学療法を先行した群で造血器系疾患の割合が高かったと考えられた．化学療法を先行した群において採卵数と凍結実施数が有意に低下したことから化学療法は卵子凍結において数的影響を与えることが示唆された．しかし卵の成熟率，変性率に差はなかったことから採卵までに至る卵の質には影響を及ぼさない可能性が示唆された．